

キリシタン時代 のあいさつ

東光 博英

人の出会いに欠かせないのは挨拶である。外国語を学び始めれば、たいてい最初に挨拶の表現を習う。また、その際、他国の人は握手や抱擁、接吻など日本固有の挨拶と異なる動作をすることは今や誰もが知っている。しかし、いざ外国人とそのような挨拶をすとなればどうであろうか。自分の習慣にない動作には戸惑うに違いない。それでは、日本人が初めて西欧人と出会った時代、挨拶はどのように行われたのだろうか。

1569年3月、京都にいた織田信長のもとを一人のポルトガル人が訪れる。キリスト教の宣教師として来日したルイス・フロイスである。信長が外国人に会うのは初めてのことであった。ところが、信長は謁見を許さず、フロイスに食事を与えて帰らせている。フロイスの記録によれば、「幾千里もの遠国からはるばる日本に来た異国人をどのようにして迎えてよいか判らなかつたから」という。

結局、両者の対面は翌4月、二条城の建設現場で実現した。この時の信長は群衆が見守るなか、フロイスに破格の好意を示すが、興味深いのはフロイスの取った行動である。それは彼が後に記した報告書簡の文言から判明する。たとえば、「私をはなはだそば近くに招くと、日が当たるから帽子を被るように」とか、「私がわらの草履をはかずに信長のそばの橋を通ると、彼は私の背後から二、三度声高に、その必要はないから草履をはくようにと言った」の記述である。つまり、フロイスは拝謁の際、帽子を取っていただけでなく、屋外にもかかわらず草履を脱いでいたことになる。帽子を取るのわかるが、室内でもないのに履き物を脱いで相手のそばを通るとはいかにも奇妙である。

これに関してフロイスは、著書『日欧文化比較』で、「われらは、帽子を脱ぐことによって敬意を表す。日本人は履き物を脱ぐことによってそれを表す」、「ヨーロッパにおけるわれらにおいては、

貴族が君主の前に履き物を脱いで行くなれば、狂気の沙汰であろう。日本人はどのような主人の前にも、履き物をはいて行くことは教養の無いことと見なされる」と書いている。当時は身分の低い者が貴人の前を通る時には履き物を脱がねばならなかったようだ。とすれば、彼は西洋式に帽子を取るだけでなく、日本の礼法に従うため敢えて「狂気の沙汰」を演じたと言えるであろう。

だが、そんな彼も外国人の同僚と挨拶する場合には西洋風に抱擁していたらしく、上記の著書にはまた、日本人は外国人が「そうするのを見ると笑う」とも記されている。また、西九州に渡来した某ポルトガル人の記録には、宣教師に会うため教会を訪れた時、日本人信徒たちが皆ひれ伏して宣教師を崇めている姿を目の当たりにし、自分の西洋式挨拶が彼らとあまりに異なることを気にして、会わずに引き返したという記述がある。このように、来日した外国人はこのほか日本の礼法に配慮していた。これは、日本式挨拶を表すのにポルトガル語の“cumprimtar”(挨拶する)を使わず、“fazer rei”(「礼」をする)と日本語を使って区別していたことから窺える。

反対に彼らを迎えた日本人について管見の及ぶ限りでは、キリシタンを除く一般の人が彼らに対して西洋式の挨拶を行った節はない。ただ、同じ時代、キリシタン大名の使節として南欧を旅した伊東マンショら4人の少年に関して面白い記録がある。ローマ教皇グレゴリオ13世の謁見式で、少年らは日本刀を腰に差した和装であったが、西欧の習慣に従って白い羽根のついたフェルト帽を被っていた。これを見て「道化役者」と揶揄する者もあった。彼らが跪いて教皇の足に接吻した後、教皇が彼らに手を差し伸べたので指に接吻したところ、教皇は彼らを立たせ、それぞれを抱き寄せて接吻したという。まったくの西洋式であった。キリシタンとして日本と西欧の狭間にいた少年たちは双方の儀礼の相違をどのように感じていたであろうか。西欧側の記録は一樣に彼らの立派な態度を讃えているが、彼ら自身の手記がないのは残念である。

とうこう ひろひで

(非常勤講師・日本・ポルトガル交渉史)